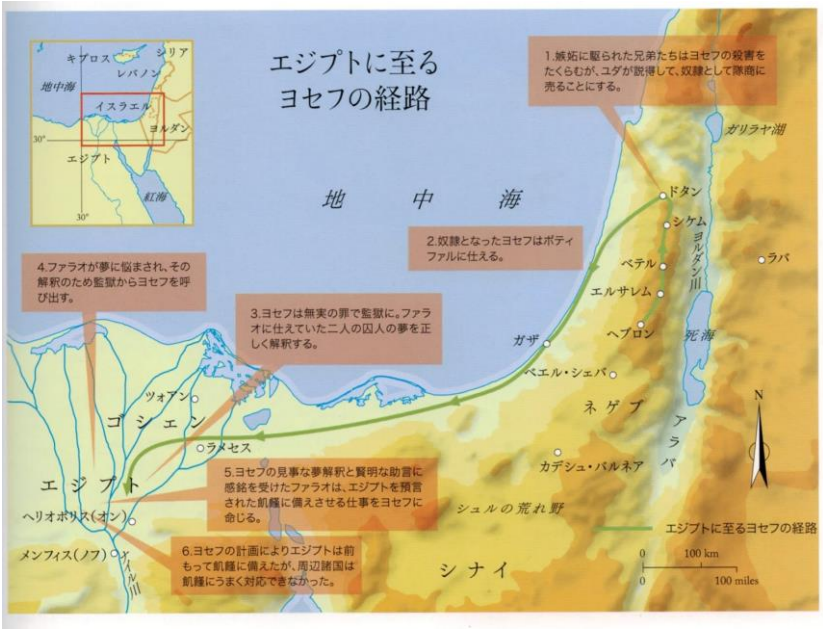

2020 年 9 月 27 日　説教「神はどうして・・」

創世記 42 章 18～28 節

エジプトに来て、食糧を調達に来たヤコブの子達は弟のヨセフだとは気が付かずに交渉しますが、厳しい条件を言われ、監禁所に入れられました。

1．故郷に兄たちを帰す条件（18～20 節）

①生きよ（18）**「ヨセフは三日目に彼らに言った。『次にようにして、生きよ。私も神を恐れる者だから。』」**監禁所での三日目にセフは兄達に言いました。生き残る道をとりなさいと。その理由はこうでした。「私も神を恐れる者だから」。この表現は、エジプトの神々ではなく、創造主なる唯一の神への信仰表明です。もちろん、ここでの言明はエジプトの言葉で話し、通訳してもらっています。もし、イスラエルの言葉（ヘブル語）話していれば、ヨセフだとすぐにわかってしまったでしょう。ですから、兄弟達からすれば、神と言う言葉を聞いても、自分達が信ずる神とは違うと思ったことでしょう。

②正直者なら（19）**「もし、あなたがたが正直者なら、あなたがたの兄弟のひとりを監禁所に監禁しておいて、あなたがたは飢えている家族に穀物を持って行くがよい。」」**ヨセフの提案は三日前とは変わります。穀物を多く持って行かせるために、9 人の兄弟達は家族のために穀物を持って帰るが、一人は人質として残すというものでした。ヨセフは空腹を募らせているだろう愛する父親、ベニヤミンの命のことがとても心配であったのでしょう。兄弟達に対して、主なる神を真実に信じる「正直者」であることを期待し条件付き帰郷を勧めるのでした。

③弟を連れて（20）**「そして、あなたがたの末の弟を私のところに連れてきなさい。そうすれば、あなたがたのことばがほんとうだということになり、あなたがたは死ぬことはない。』そこで彼らはそのようにした。」**しかし、件末の弟をヨセフの所に連れてくる条件は変わりません。ヨセフはそれほどにベニヤミンに会いたかったのです。また、兄達に主にある真実さに期待したのです。つまり、その言葉を守れば彼らは忠実な者として、死ぬことはないと約束したのです。兄弟達はそれを認めました。ヨセフのうちにはしたたかさも身についていました。

2．兄達の苦しみ（21～23 節）

①罰を受けている(21)**「彼らは互いに言った。『ああ。われわれは弟のことで罰を受けているのだなあ。あれがわれわれにあわれみを請うたとき、彼の心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでわれわれはこんな苦しみに会っているのだ。』」**エジプトに来る前、ドタンにおいて、兄弟達からヨセフは穴に入れられ、イシュマエル人の隊商に売られたヨセフ。その時に彼は憐みを請うたのです。37 章にはそれが記されていません。しかし、その時に兄達は、ヨセフの願いを聞き入れなかったことを思い出しているのです。そして、自分

たちがその罰を受け苦しんでいるのだと理解しているのです。

②ルベンの弁解（22）**「ルベンが彼らに答えて言った。『私はあの子に罪を犯すなと言ったではないか。それなのにあなたがたは聞き入れなかった。だから今、彼の血の報いを受けるのだ。』」**ヨセフが売られた時に、確かに長兄のルベンはそこにいませんでした。しかし、ルベンに非がなかったかといえば、そうではありません。長兄として彼はもっと強くヨセフを守るべきだったでしょう。兄弟たちに罪をなすりつけるなかに、ルベンの罪が透けて見えてきます。

③ヨセフは聞いていた（23）**「彼らは、ヨセフが聞いていたとは知らなかった。彼と彼らの間には通訳者がいたからである。」**こうした兄弟の言い争いをヨセフは全部理解していたのです。当たり前です。彼にとってイスラエルの言葉（ヘブル語）は母語であったからです。兄弟たちはヨセフが通訳者を使っているから、ヘブル語を理解しているとはつゆとも思いませんから、言いたい放題のことを言っていますが、兄弟達の心のうちにあることを、全部聞いていました。

３．兄達の故郷への道（24～28 節）

①ヨセフは泣き（24）**「ヨセフは彼らから離れて、泣いた。それから彼らのところに帰って来て、彼らに語った。そして彼らの中からシメオンをとって、彼らの目の前で縛った」**ヨセフが泣いたのは、兄弟達がそれぞれ葛藤している様子を見たからでしょうか。しかし、心を鬼にしてもどって来て、次男のシメオンを人質としてとり、彼らの前で縛って他の兄弟たちをカナンに帰す手筈をとります。

②銀をめいめいに（25）**「ヨセフは、彼らの袋に穀物を満たし、彼らの銀をめいめいの袋に返し、また道中の食糧を彼らに与えるように命じた。」**ただ少したくさん彼らが食糧を持ち帰ることができるように、彼らの袋に穀物を満たしたのです。また、彼らが支払った銀についても、それぞれの袋にもどしたのです。さらに、彼らが道中に必要な食糧をも確保するように部下に命じたのです。

③身を震わせた兄達（26～28）**「彼らは穀物を自分たちのろばに背負わせて、そこを去った。さて、宿泊所で、そのうちのひとりが、自分のろばに飼料をやるために袋をあけると、自分の銀を見つけた。しかも、見よ。それは自分の袋の口にあった。彼は兄弟たちに言った。『私の銀が返されている。しかもこのとおり、私の袋の中に。』彼らは心配し、身を震わせて互いに言った。『神は、私たちにいったい何ということをなさったのだろう。』」**兄弟達は支払った銀で得た穀物を、ろばに背負わせ、故郷に向かいました。しかし、彼らは帰郷する途上で自分たちが支払ったはずの銀が、それぞれの袋に戻されていることに気づきます。失うことに心を痛めることがありますが、理由もなく銀が手元にもどっているということも不審です。彼らは悩み始めたのです。そして、これらのことをみそなわしておられる神がなぜこんなことをなさるのかと、いぶかしがく思ったのです。

《結論》　ヨセフには一貫として、アブラハム、イサク、ヤコブの神を信ずる信仰がありました。ですから、兄達に「生きよ」（18 節）と言った時、「神を畏れる者だからだ」と伝えています。しかし、すぐに自分の素性を明かし、直接的な援助をしようとはしていません。彼が兄達に難題を吹きかけているように見えますが、何らかの主からの促しがあったのではないでしょうか。たとえて言うならば、野球の打者がバットを振るのに、引き付けに引き付けて、最上のタイミングをねらって打つように、その時を待たされていたのです。まだ、すべてを明らかにする時ではないと踏んでいたのです。それは兄達に自分たちの罪を自覚させようといった、上から目線でもありませんでした。あくまでも主から導かれつつ、彼は事をなしているようです。カナンに向かう 9 人の兄達めいめいの荷物に穀物や、銀をそれぞれの袋に入れなおさせたのも、そのようにするように促されているように思われます。

一方、兄たちはどうだったでしょうか。弟のベニヤミンを連れて帰ってくるように改めて言われた時に、彼らはヨセフを売った時のことを思い出して、その罰を受けているのだと考えました。ルベンは「血の報いを受けている」とも言っています。きっと兄達は、心の中にいつも罪責感があったのでしょう。兄達には、神の前に悔い改める時を迎えようとしていたのです。また、兄達は帰り道で自分たちの荷物に、銀がもどされているのを発見して、このように言っています。「神は、私たちにいったい何ということをなさったのだ。」と。彼らは、神は何を語りかけようとしているのかを考えました。兄達は自らの不信仰を知らされたことでしょう。彼らも、人間にではなく主権者である神に頼る信仰にもどされなければならなかったのです。アブラハム、イサク、ヤコブの神はヨセフばかりでなく、彼らも受け継いでいかなければならなかったからです。

私たちも試練や困難に遭遇します。また、「どうしてこんなことが起きるのか」と神がわからなくなることがあるかもしれません。アメリカ在住の中村佐知姉は三女の美穂さんがスキスル性胃癌になるという晴天の霹靂に出来事に遭遇しました。皆でいやされるよう祈り続けますが、美穂姉は天に召されたのです。どうしてそのようになるのかわからない。しかし、佐知姉はそこには悲しみと同時に、愛と恵みをいただいたと証しされています。「大切なことは、答えを見つけることではなく、すべてを理解することでもなく、不条理な現実の中でもなお主を愛し続けることができるか」という一文がありますが、試練の中でも主を愛していく信仰が私たちにあるでしょうか。ヨセフ自身は、これまでも主を愛し、これまでにそれを何回となく探られ、今その兄達がその信仰のチャレンジを受けているのです。私たちも、試練や苦難の時にも、主を仰ぐ信仰をいただきたいのです。「試みに会わせず、悪より救い出したまえ」と

祈る一方で、試みの中でも主を愛する信仰を育てて下さいとも祈りつつ、
この旅路を主の御手に導かれながら歩んでいきましょう。